



ソ聯研究資料第十三號(昭和十年七月)



赤軍に對する批評



滿鐵經濟調查會

始





# 赤軍に對する批評

## 目次

戦争の豫想(シウムスキー)……………一頁

赤軍と第七回ソウェイト大會(ザイツォフ)……………一九



# 赤軍に對する批評

## 戦争の豫想

帝政露國大佐 シウムスキー

### 一 赤軍の裝備

赤軍に關する批評は從來決して不足を感じなかつたが、特に日本とソ聯邦の對峙が始まつて以來は多少とも名のある筆者の各種の批評が應接の暇ない程現はれた。併し批評者の主觀によつて赤軍は全然無力の様に說かれるかと思ふと一方では又頗る威力を有するものゝ様に言はれて、世人は真相の把握に迷はされて居る觀がある。

漸く最近のこと一白系露字紙に大體次の様な赤軍觀が載つて居た。即ち赤軍は見かけ倒してあつて、裝備は劣悪で、無教育の將校と無能な將官によつて率えられ貧弱な軍需工業と未發達のしかも破滅的不良状態にある鐵道に依頼して居る。つまり赤軍



の價値は零だと云ふのである。

然るに此の悲觀的批評の少し前にエウル紙に掲げられた有力な一佛國政治家の言によると赤軍の裝備は素晴らしく、給養は極めて潤澤であり、若い卓越した指揮官を有し、九十萬に及ぶ軍隊が帝政ロシアの軍隊よりも數倍敏活であり、よく統率されてゐるといふ。つまり赤軍の價値は無量大であるといふに等しい。

此の種の極端な批評は評者の抱く政治的立場に禍されたものであることは明かである。然るに軍事技術の問題を取扱ふには最も冷靜な態度を必要とするので、斯様な態度を排斥しなければならぬ。そこで吾人は現在のロシアの司配者に對して敵愾心を抱くことに終始變りはないが、出来るだけ此の感情を殺して、公平な態度を以て此の問題に對しやうとするもので、斯くしてこそ初めて凡ゆる技術的問題の賢明な解決を計り得るのである。

現在ソウエート・ロシアの陸軍兵力は六〇萬人から九四萬人に増加し（イズウエスチャ紙、一九三五年一月三十一日）歩兵九〇個師團、騎兵一七個師團半から、歩兵一〇一個師、騎兵二八個師、合計一二九個師團に増大して居る。

歩兵師團の三分の一は正規軍に屬し、在營年限二年であるが、三分の二は地方軍（リトリアリナヤ）と稱するものに屬して在營年限は短縮されて居る。

一九二四年有名な獨逸のフォン・ゼクト將軍が特殊の使命を帯びてソウエート・ロシアを訪れ、數個月間滞在したが、同人の意見が赤軍の組織に大きな影響を及ぼしたことは明かである。世人も知る如くゼクト將軍は軍隊は精銳な突撃隊と補助的軍隊の双方から成るべきであるといふ見解を抱いて居るが、之を獨逸の例で見ると、精銳の軍隊に當るのが國防軍（ライヒスヴェーアー）であり、二次的の軍隊はヒットラー派の各種團體より成る二一個師團である。これと同様に赤軍も正規（カドローウイ）軍の師團と、地方（テリトリアリナヤ）軍の師團とに分れて居るのである。

併しながら、フォン・ゼクトの影響は單にこれだけに止まらず、後述する通り軍隊の教練法及び戰術にも影響を示して居るが、赤軍は其の戰術を將來實戰に適用しやうとして居る譯である。一九二九年には獨逸現在の陸相ブロムベルグ將軍が獨逸參謀本部の將校數名を同伴して入露した。獨逸國防軍舊長官ハムメルシタイン將軍も其の就任前に入露したが、其の際、情報部長フォン・キュレナウ中佐も同行した。斯くし



て一九二四年から二九年にかけて、獨逸參謀本部の將校は軍隊の組織に關してフルンゼ及びウオロシロフに助言を與へた一方情報部長は獨逸參謀本部にとつて必要と認める赤軍に關する資料を自分の手帳に書込んだのであるが、將來これが大いに役に立つことは明瞭である。

赤軍の歩兵師團は三個聯隊から成り、聯隊は三個大隊から成つて居る。各聯隊は輕及び重機關銃一四〇を有する。ポーランドの聯隊は機關銃、一一七を有し、佛國の聯隊は一五二を有する事實に徴し赤軍師團の機關銃數は獨逸をも含む歐洲の如何なる國の軍隊にも大體譲らないのである。兩半球がしばらく平和の状態を續けて居る間にソ聯は數年前突如非常な勢で軍需工業の動員を開始し、其れ以來あたかも戰時状態にある觀を呈して居る。それで第一次及び第二次五個年計畫中に平時としては未聞の軍需工業動員を包含させて赤軍が歐洲各國軍隊の標準にまで裝備を充實させ得たことは何等驚くに足らないのである。

さらにソウェートの歩兵聯隊の裝備としては機關銃、一四〇の外に輕砲一個中隊と拳銃三個中隊がある。そこで軍團に屬する重砲及び飛行隊並に軍司令官の指揮下に屬する最も大きい大砲を計算に入れると、赤軍の一個師團に振當てられる兵器數は平均略次の如くなる。輕砲六〇、重砲一五、戰車四〇、装甲自働車九〇—一〇〇、飛行機一六。斯くして茲でも赤軍の兵器數は獨逸をも含む他國軍隊と略同等なのである。

是等の數字的材料の外に、赤軍裝備の紹介上價值のある批評は、一九三三年五月一日の觀兵式を實見したポーランド陸軍武官の談と、一九三四年五月一日の觀兵式に臨んだタン紙通信員の記事である。ポーランド陸軍武官は曰く、吾々は凡ゆる種類の兵器を網羅した充分に機械化された二個師團と、莫大な數の重、輕装甲自働車、立派な高射砲隊、數個の堂々たる無線通信所、約二〇〇の戰車、三〇〇の飛行機、其の内に二發動機及び五發動機の重爆機數台が含まれるものを實見した。此の爆撃機はモレンスクからワルソーまで無着陸で翔破出来るのである云々。勿論此の觀兵式はメーデーの示滅のために行はれたのであるが、其れにしてもモスコイだけに二〇〇の戰車と三〇〇の飛行機を集め得た事實を見逃す譯に行かない。假りにこれはモスコイ軍管區全體の戰車及び飛行機を動員したのだとしても、二個の完全に機械化（モートルリゼ



「シヨーン」された師團の外に、尙、最も裝備の良い五個師團に要する戦車數と、一〇個師團と、軍司令官に屬する空軍豫備隊との裝備に相當する飛行機數を參加させた事實の價値を減殺するものではない。

一九三四年のメーデーの觀兵式を見物したタン紙記者の報道は更に注意を惹くもので、此の時集められたものは戦車四八〇、飛行機五五〇、其の内爆撃機一九〇、偵察機二七〇、驅逐機九〇で、尙、若干機は一時間四〇〇軒といふ凄い速力を有して居る、即ち戦車數は一〇個師團團用に、飛行機は二四個師團用に相當し、しかも是がモスコイだけの事であつた。

勿論兵器の數量だけで軍隊の戦闘能力を判定し得るものではなく、戰鬥能力に就いては後述するが、ソウエートの軍需工業が多大の躍進を遂げたことは認めない譯に行かない。

今や獨逸は可なり遅れ馳せに自己の軍需工業の動員を開始し、工場は晝夜無間斷の三交替制で操業して居る。勿論獨逸はソウエート・ロシヤに追付くことになるが、然し追越しはしないだろう。それは追越せないのではなくて、師團の裝備には飽和の

限度があるからである。此の限界を越えようと師團は反つて動きの取れない重苦しい人の群と化して、戰鬥力を弱めることになるのである。赤軍の裝備は數量上如何に充實したにせよ、其の裝備計畫の重要部分たるモーター化（從來機械化と譯されて居るがむしろ發動機化もしくは動力化と譯すべきで、主として自働車、戦車の徹底的使用を意味す）が未だ一向完成に近づいて居ない。尤も既に高射砲隊の全部、重砲隊の大部分と野戦無線所はモーター化されて居る。然し全部モーター化されたのはロシヤ内部の三個師團と國境方面の七個師團に過ぎない。しかし他國の軍隊ではモーター化は未だ此の數に及ばず、ポーランド軍の如きは全然モーター化を拒否して居ることを考へれば以上の状態でもさして少いとは云はれぬ様である。ポーランドの陸軍次官は議會に於いて、モーター化は多額の費用を要するだけで、得る所がない、兵士は如何なる土地でも徒行すべきものである、吾々は兵士が戰場に於いて良好の銃、充分の彈藥と糧食を有する様に努力する心算であると言明した。是は勿論ピルスツキー元師の意見に相違ないが、赤軍にとつてはモーター化は特別の重要性がある。何となればロシヤには鐵道が少く、しかも其の輸送状態が頗る悪いといふ事情から生ずる當然の歸結で



ある。

獨逸が攻撃する場合、戦争は勢ひロシア領土内で行はれる以上、不良な鐵道に依倚することは敵味方同様であることは勿論であるが、しかし自働車輸送力の優越して居る側が當然有利な地位に立つこととなる。自働車を充分に備へて居る軍隊は鐵道線路から一五〇乃至二〇〇軒も離れて行動することが出来る。

回顧すれば、露將レネカンフは自軍が鐵道線路から遠くかけ離れて給養の不足を感じ出したといふ理由で東部プロシヤに於ける攻撃を中止したのであつた。もしも彼に充分の自働車が有つたならばヒンデンブルグの背後に對する攻撃を繼續することが出来て、ヒンデンブルグは反對にサムゾノフ(露將)の陥つた様な危地に陥つたことであらう。

自働車工業に於いてソウエート・ロシヤは勿論獨逸よりも遙かに遅れて居る。獨逸には七五萬臺の自働車が有つて、近來毎年一〇萬臺宛製造されて來たが今年からは二〇萬臺宛製造し、その内一〇萬臺は軍隊のモトリゼーション(モーター化)に充當されるのである。ソウエート・ロシヤに於ては一九三三年の一〇個月間についてみるに

僅か四萬臺の自働車を製造したに止まる。既存の自働車トラクター製造工場七個に、第二次五年計畫によつて更に四個を加へることになる。そして赤軍は結局其のモーター化に必要な自働車數を得るにせよ、それはどうしても今から二―三年後になる。

三、五〇〇機以上に及ぶソウエートの空軍は無論歐洲に於いて最も充實したものに屬するが、又、質的にも歐洲列強の空軍に劣らない。

赤軍には他國の軍隊に無いものが有る。それは一〇個の「化學大隊」と各軍團に附屬する化學部隊で、後者は毒瓦斯の使用について軍隊を指導することを任務とする。赤軍の裝備は大體以上の様な状態にあるが、この簡単な資料によつても赤軍の價値は輕蔑出來ぬと共に、後述する通り、又何等買被るべきものでもない。そこで吾人は極端な主觀的判斷は實際的價値がない故、批評家諸君がその政治的立場からの同情が何れの側にあるにせよ、左様な批評は避けるべきであると繰返して言ひ度い。

## 二 赤軍の首腦者

第七回全聯邦ソウエート大會の報告演説に於いてトウハチエフスキー(譯註―現陸海軍次官)は赤軍の聯隊長の一五パーセントと、最高級指揮官(將官)の五〇パーセ



ントは各種の陸軍大學を卒業したと言明したが、同人の此の數字には相當大きな訂正を必要とする。軍事教育を有しない總ての赤軍將官は陸軍大學内に設けられた最高幹部完成講習といふ大學程度の課程を履ませることになつて居る。此の講習を終つた將官中の一人たるシヤデンコ某は、クラスナヤ・ズウエズダ紙上に卒直に次のやうな質問を發して居る。「三年かゝる大學の課程を二個年で、しかも小學卒業程度の學力しかない者に終了させることは無意味ではあるまいか」と。

斯くして全體の五〇パーセントに當る「高等軍事教育を有する將官」の内にブジョンヌイヤガイ等の將軍が入つて居る譯である。一九三三年のソウエート大會に於けるウオロシロフの長い報告演説にも將校の軍事教育程度について述べてある。即ち聯隊長及び大隊長の一〇パーセントと、中隊長以下の將校の一九パーセントは矢張何等の軍事教育を有しない者であるといふ。此の現實曝露によつてトウハチエフスキーが高等軍事教育ある將官の率を誇らうとした意志に反して、赤軍將官及び將校には教育程度の低い上に何等の軍事教育を有しない者もあることが強調されてゐる。

聯隊及び大隊の長官の十分の一、尉官級の五分の一が何等の軍事教育を欠き將官

級の中に小學校卒業程度か、聯隊の教導團終了程度の學力しか無い者の存することは相當重大な欠陥であつて、赤軍裝備の優秀、潤澤といふ長所を減殺すること頗る大きいのである。赤軍の首腦者たるウオロシロフ自身が勞働者あがりて尋常二年を終了したに過ぎない。現在赤軍のモルトケたる參謀總長エゴロフは高等小學校とカザンのユンケル學校（譯註—中等教育を有しない者を收容する年限二、三年の陸軍學校にして卒業後、特務曹長級となる）を卒業したに過ぎない。大學程度の教育を有せず、戰略も戰術も、軍隊の組織も一向解しない者が參謀總長であるといふソウエート・ロシヤの實際は確かに常識を外れて居る。エゴロフは一九〇五年の革命に参加した廉て舊露西亞陸軍から追はれたが、歐洲大戰時に又召集され、ポーランドとの戦争にはウクライナ・ガリシヤ戰線に於いて軍隊を指揮し、當時スターリンが其の軍隊の政務コミッサールとなつて居た。ウオロシロフもエゴロフも自分の軍事上の素養や能力によつて立身したのでなくて専ら革命の功績によるもので、特にエゴロフはスターリンとの個人的關係によることは明白である。他の二人の軍司令官、ウボレーウイチとヤキールは共に三十八歳であるが、前者は特務曹長速成學校を後者は實業學校



を卒業した者である。ブヂョンヌイの學歷は聯隊の教導團卒業といふのである。是以上赤軍將星の履歷を列挙しないが、唯吾人の言はんとすることは、赤軍が獨逸軍の様な有らゆる點に於いて精銳な軍隊と衝突する場合に赤軍將軍中に無學な者や、全く軍事的素養のない者が存するといふことが重大な結果を生じかねないといふことであつて獨逸軍の統率者は高等教育を有し、怪しげな國內戰の経験ではなくて眞正の戰爭の經驗を有するものであり、四年間に互つて世界の二十三個國の軍隊を相手に獨軍を指揮した人達なのである。軍人以外の大官に軍人としての高位を授與することは舊露西亞に於ても獨逸に於いても行はれたには違ひないが、左様な場合には軍隊指揮の實權は常に參謀長にあつた。然るに赤軍の場合にはこれと事情が異り、軍事を解しない司令官や總司令官が參謀長を無視して一切を指揮しやうとするばかりでなく、軍隊に直接關係のない大官が戰略や、軍隊組織の問題を指導しやうとするのである。

一月三十一日のブラウダ紙が「現代の最大の戰略家はレーニンとスターリンである」と書いたとて是は言葉の綾で、さして不都合はないにせよ、此の戰略家への昇進が實際に行はれるのだから恐れ入つてしまふ。革命後の國內戰時代にはポリシエウイキ

ーは常に舊露軍の參謀將校の意見を尊重したもので、元參謀大佐たるカーメネフ、レベデフ、シヤーボチニコフ等は事實上の軍司令官で、有名無實の司令官が上に立つて居るに過ぎなかつた。しかるにポーランド戰役頃になると軍司令官が參謀長の後見を排して獨立を欲すると共に軍司令官附の政務コミツサルが純粹に戰略上の問題にまで容喙するようになった。スターリンはエゴローフが司令官で、且つブヂョンヌイの騎兵が出動して居た南部戰線のコミツサルであつたが、總司令官トウハチエフスキーの非常に重要な命令の遂行を妨げた。トウハチエフスキーはブヂョンヌイの騎兵隊と其他の部隊がワルソー總攻撃に参加すべくガリシヤから北方ワルソーに向けて進軍することを要求したに對して、スターリンはリウオフの陥落を熱望し、上記の軍隊がどうしてもリウオフに進軍すべきことを要求して、頑固にブヂョンヌイに迫つた。無比の權力を有する黨書記長の言にどうして逆らふことが出來やう。そしてブヂョンヌイがリウオフに進み、トウハチエフスキーがワルソーに進んだ結果、赤軍は扇形に分散し、南方軍の救援を欠いだトウハチエフスキーは敵軍の爲めに撃破されて對ポーランド戰は遂に敗北に終つた。勿論トウハチエフスキー自身もしつかりしなかつたのであ



るが、此の場合彼を責めることは出来ない。ゼールジンスキーは軍隊の後から早馬で附いて廻つて軍隊が晝夜兼行でワルソーに進撃するやうに促した。參謀本部の舊將校達は軍隊が餘り強行軍をすると、すつかり分散してしまふからとて、無能な戰略家達に反對したが、それは無駄であつた。ワルソーへ、とゼールジンスキーは頑固に主張し、ビルスツキーを生捕りにして自分の手で銃殺してみせると言つて焦つた。

赤軍の將軍やソウエートの大官が參謀長の意見を無視することは赤軍の新野外要務令にはちやんと禁止されてあるだけに一層注意を惹く。赤軍將官の教育の不充分を顧慮して新野外要務令第十八條には戰鬥や演習の前に當つて、凡ゆる戰略、戰術問題に關して參謀長が自分の意見を吐露すると共に、如何にすべきかの結論を司令官に提示すべきものと規定してある。しかし此の條項は赤軍將官の最高層には何等關係ないので、「現代の最大の戰略家」たるスターリンには勿論適用されない。以下に述べるやうに是等の戰略家が二戰線に對する重要命令を決定した例も斯様な事情に依るのである。

### 三二つの戰線

上に述べた様に赤軍一二九個師を統率する首腦者は専門的素養も教育程度も不足な人達である。とは云へ、優秀な裝備と潤澤な給養を有する一二九個師といふ大軍は種々の欠陥はあるにせよ、それが何れかの國家的聯合の側に味方するといふことは賢明な政治家の誰しもが輕視し得ない重大事である。しかし是は一般的評價であつて、現在、赤軍に覺悟を促す國際間の政治的状態は果して如何、兵力及び兵器の計算も此の國際状態の如何によつて意味を持つて來るのである。

國際状態は未だ最後の鮮明にはならないが、少くとも、同時に獨逸と日本の兩戰線の戰爭に備へるか、或は日本の頗る信頼出來ぬ脅威的中立の下に、獨逸一國との戰爭に備へなければならぬ。前者の場合が一層可能性があり、また後者の場合にはどの道日本に對して特に軍隊を配置する要があるから、矢張二つの戰線に備へなければならぬ譯である。互に一萬軒を距て、それを繋ぐに唯一本のシベリヤ鐵道を以つてする二つの戰線に於いて軍事上歐洲に於いて最強の獨逸と、亞細亞最強の大國日本とを同時に敵として戰ふことは、假令歐洲に於いて味方を有するにしても、世界の如何なる武將も未だ嘗つて直面したことの無い程の大問題に相違ない。此の場合軍事技術



の原則が許す唯一の對策としては殆ど全力を集中して主要戰線、即ち、對獨戰線に對し攻勢を取ると共に、極東戰線に於いては僅少の兵力を以つて、退却による緩漫な防禦に出る他にはない。一方の戰線から他の戰線へ軍隊の移動は遠くて問題にならないから勢ひ、極東の相當廣大な地方を一時放棄する大膽な覺悟がなければならぬ。吾人が一時と云ふ所以は斯様に二戰線に互る戰爭に於いて、日ソの勝敗は、歐洲大戰に於けるオーストリアの勝利がガリシヤ或はウオルイニに於いて決せられず、實にマルヌに於いて決せられた様に、アムール地方に於いて決せられず、ドニエプル河及び西ドウイナ河畔に於いて決せられると考へるからである。

大戰時に獨逸軍は各軍團毎に別個の鐵道を使用させて、一〇日乃至一二日間にワルソーからヴェルダンまで多數の軍隊を移動させることが出来たが、全軍に對して一本の鐵道しか有しない赤軍にとつてアムール(黑龍江)からドニエプルへ一軍を移動させるには數個月もかかるのである。故に斯様な機動は問題にならないと共に、戰略の根本原則は勢力の等しい二つの軍隊を極東と西部國境とに配置する様なことを斷じて許さない。そんなことをする者には「到る所に於いて均勢ならうとする者は到る所に

於いて弱勢となる」といふ戰略の陳腐な講義を聞かせ度くなる。それ故最近のソウエート大會に於けるトウハチエフスキーの言明の如く、赤軍の方針が二つの強力な軍隊の一方を極東に、他方を西部國境に配置しやうとするにありとすれば、これは甚だ間違つたものである。斯様な方針は上記の如く兩戰線とも弱勢を來す結果になると共に、軍事技術の根本原則に背き、數千年の戰史の經驗にも反するものである。

獨軍の全力を佛國戰線に集中して、對露戰線には極めて僅少の軍隊を割くことを極力主張したフォン・シリッフェン元師は言つた、「勝たなければならぬ又勝ち得る戰爭に敗けるよりは、東部プロシヤのような一地方を失ふ方がましである」と、然し世人も知つて居るように、小モルトケは此の大膽な決斷を要する唯一の正當な方針に出ることが出来ず、一時的にせよ東部プロシヤを放棄することは厭やであると云つて、對佛戰線から二個軍團を東部プロシヤに送つたが、その爲めにマルヌの敗北を招き、延いて戰役全體の敗因を作つたのである。

ロシヤの場合は領土が廣大であるだけに、シリッフェン元師の云ふ一地方が沿海州でありアムール州であり得る。然し此の規模の如何によつて原則的問題を動かすに



は足りないから赤軍としてはシリップフェンの言葉を言ひ變へて沿海州やアムール州を一時放棄しても戦争に敗けない様にすべきである。

一時他の一方を無視して、一方だけに全力を以て當るといふことは言ふには易くして行ふに難いもので、剛毅、果斷な歴史的偉人だけが稀に行ひ得るのである。遺憾ながらトウハチエフスキー及びスターリンの決定した方針にはポリシエウイキー特有と號する鐵石の意志はそれが今ロシヤの艱難に際して折角必要な時に認められない。此の方針には強い意志も、科學的基礎付けも認められず、單に現前しつゝある事件の前に畏怖して、西部國境に、又極東に於いて無意識的に門扉を閉して居るに過ぎないしかも其の扉が甚だ堅牢でないことを全く御存知ないのである。(ボスレードニヤ、ノイオスチ紙四月二十日及五月五日號より譯出)

## 赤軍と第七回ソウエート大會

帝政露國大佐　　ザイツォフ

先程終了した第七回ソウエート大會(譯註—本年一月末より二月初にかけて開催)に於いてソウエートの要人達は會議參列者のみならず外國に向つて吹聴するためにつて赤軍の充實を禮讚した。彼等の言によれば改善された赤軍は敵にとつて大きな脅威となり、味方にとつては頼み甲斐あるものとなつたといふのである。ソウエート・ロシヤに於いては萬事數字で表はされ、こまめな統計によつて成功が證明されるのが常であるが、しかし其の數字が何れだけ實際に符合して居るかは甚だ問題である。

ソ聯邦人民委員會議長モロトフ並に陸海軍人民委員次長トウハチエフスキーの二報告演説は一見近年に於ける赤軍の非常な充實に關する動かし難い證據を示して居るかに見える。一言に此の充實を言ひ表はせば陸軍の兵時兵力を一倍半に増加し、國防豫算を一九三三年の四倍に増額し、各種兵器の裝備を數倍に増加したのである。言葉通りに是等の事實を信するならば、ソ聯邦の武力は疑もなく増大して、赤軍は恐ろし



く強大になつた譯である。然し果して其の通りであらうか。吾々は是等の數字を検討して行くに従つて稍異つた歸結に導かれるが、更にソウエートの要人が黨大會には遙かに卒直に自白するに引かへて、ソウエート大會の公式演説には黙して語らない事項を調べるに及んで、成功を誇る數字の内容は愈よ怪しくなつて来る。

赤軍の常備兵力は一九三四年に五六萬二千人から九四萬に増加されたが赤軍の重大欠陥は從來常に其の大部分を形作る地方軍師團に對する指揮官の不足にあつたので今度の兵力増加によつて此の點がどうなるかと見るにトウハチエフスキーの言によれば何等の方策が講ぜられて居ない。常備兵力の増大は主として（トウハチエフスキーの言によれば第一、及第二の理由として）龐大なソウエート國境、バルチック海、黒海々岸、ムルマンスク地方、時に極東に於ける防備區域の衛戍兵の新設によるのであるトウハチエフスキーは單に第三、第四の理由として、潜水艦隊、空軍、戦車、砲兵の充實を擧げて居るに過ぎない。これで見ると後述する最新兵器の裝備充實の結果、これらの兵科に對する兵員の増加は云ふに足りないのである。斯くして今度の兵力増加は機動部隊の兵力増加でなくて、國境警備隊の兵員充實を意味するのである。これは

赤軍の國境への動員、集結の事情は國境防禦を託するに足らないので、特に國境に守備隊を常駐させる必要がある事を物語つて居る。大戰前の露國々境に比して現在ソウエートの國境が幾らか縮少されて居るとは云へ、頗る長大なものであるから、以上の目的に三〇萬の新兵力を増してもそれは全く不充分である。これは隣國に對する恐怖心がさせた周章狼狽の舉動であつて、國防に必要な兵力の冷靜な計算とは云はれない。

加之さらに一つの重要な訂正を加へる要がある。赤軍の總兵數を論ずる場合に看過出來ないのは大會に於けるトウハチエフスキーの次の言で、曰く「吾が大部隊の迅速な移動に期待をかけることは非常に慎重を要する。そこで西部東部兩國境とも獨立の強固な防禦を必要とする。最も活動的で獨自に移動し得る兵科たる空軍ですらも東西戰線の必要に應じて一方から他方へ移動させる様な贅澤は吾々に許されない」と。赤軍及び其の空軍の總兵力を云ふ場合に此の自白を忘れてならないのに、とかくこれを忘却して、平時九〇萬の兵員と戦闘機三千臺を赤軍の戰鬥力の基本と見做し易い。然るに實際には現在の國際情勢と、ロシヤの不變の地理的條件によつて、赤軍の亞細亞又は歐羅巴に於ける實際戰鬥力の計算に際しては右の數字を少くも一・五分の一に、



若くは二分の一に縮少すべきである。

トウハチエフスキーの言によれば獨り赤軍の兵數が増大したばかりでなく、其の指揮官の質が向上したといふ、併し其の言ふ通り現在赤軍の四五・五%が勞働者出身であるにしても、是は何等質的改善を證するものではない。また農民出の赤軍々人の一〇分の九がコルホズ(共營農場)員であるといふことは、モロトフが同大會に於いて一九三五年の播種總面積の一〇分の九がコルホズ及びソフホズ(國營農場)に屬すると述べて居る所から見て當然なことである。唯是等のコルホズ員によつて何れだけ戰鬥力を増したか、問題である。併しこれは共營農場への強制加入が農民のソウエート國家に對する愛國心を非常に増大させて彼等を掠奪した政權にとつて信頼すべき支持者たらしめたと考へない限りは不可能なことである。で此の一〇分の九のコルホズ員はむしろ赤軍の強味ではなくて、反つて弱味と見るべきである。さらに同人の掲げた軍の質的向上の例竝に軍人中の共產黨員數の増大は同様に不確實なものである。將校の三分の二、將官級(師團長、軍團長)の九〇乃至一〇〇パーセントが共產黨員であるといふが、この事が軍隊の戰鬥力増大の特徴とは見做し難い。唯これによつて黨員にな

らなければ赤軍の將官になれないと云ふことが判る。黨員的色彩によつて指揮官の質がどれだけ向上するものか吾人には餘り信ぜられない。

是等の一向不確實な數字と共にトウハチエフスキーは他の稍確實なことも述べて居る。即ち聯隊長の一五パーセント餘、及び赤軍將官の半數以上は大學(悲しいことにソウエートの大學)に於いて高等軍事教育を受けた者であると。その代り彼は丁度一年前第十七回黨大會に於いて彼の長官たるウオロシエロフが自白して上級指揮官(即ち佐官)の一〇パーセント、尉官の二五パーセントは全然軍事教育を有しないと云つたことを忘れて居るのである。兩方とも公式聲明の數字であるが、兩方付き合はせて見るとトウハチエフスキーの言はうとした意味と稍違つたものとなり、現在世界中の如何なる國の軍隊も赤軍のように素養の不足な指揮官を有するものはないのである。

一九三三年の軍事豫算一五億ソウエート留から一九三五年度の六五億留への増大は特に外國の新聞雜誌に問題になつた。既にウオズラジデーニエ紙上にソウエートの留をいきなり金フランに換算することの如何に輕卒であるかについて充分に反駁され



たが、是の數字自體が甚だ無意味なものである。これについてトウハチエフスキーは單に財務人民委員グリニコの説明を援用するに止めて沈黙して居るが、ソウエート大會の終了後、參列者の一層局限されてゐる、ソ聯邦中央執行委員會の第一次會議（ブラウダ紙一九三五年二月九日）に於いてグリニコは國防豫算の四倍増額の眞の原因を説明して居る。同人の言によれば其の原因は三つある。第一の、最重要らしい原因は彼曰く「カード制廢止に備へるため、また我が國家經濟内部に價値の妥當な比率を設定するため、既に一九三四年以來それまで餘りに低かつた軍隊用糧食及び材料購入値段を部分的に引上げて來た：一九三五年に是等値段を更に引上げた結果、赤軍は此の點に於いて他の國家的消費者と同格になつた。一九三三年の豫算を増して六五億とした理由は大部分之によるのである」と。第二の原因は兵員が五六萬二千人から九四萬人に増加したことであると云ふ。是は全く當然なことであるが、新しい兵員を收容する兵舎がないために新築するとすれば尙更のことである。第三の原因は彼の言に曰く「長期の製造期間を要する陸軍及び空軍裝備品の内、一九三四年度に出來上つた分に對し一九三五年度に支拂を行はなければならぬ」ことである。可なり曖昧に云つて

あるが、注文の出來上りが遅れて、普通ならば數年間に漸次に支拂ふべきものを一時に支拂はなければならなくなつたといふ意味である。唯それに附け加へてグリニコの言つて居ることが興味がある。曰く「茲で私が斷つて置かなければならないことは、重工業人民委員部は軍隊用品の注文を順調に遂行したが、注文時の値段を若干超過した爲めに大なる支出を必要としたことである」と。

財務人民委員の以上の卒直な言明によつて國防豫算の増大は何等赤軍裝備の質的改善を意味するものでなくて、軍隊給養の値段をソ聯邦の公分母に従つて引上げたに過ぎず實質的に變化はないのである。留の購買力が以前と違つて、パンを買ふために多額を要することゝなつたために豫算も一五億から六五億に増加されたのである。

次に兵器のことであるが、トウハチエフスキーは是に關して絶對數を掲げずに、前回のソウエート大會當時（一九三〇年度）の數字との比較だけを示して居る。空軍は此の期間に三個三分の一倍に、小型戦車は二五倍に戦車は（様式の如何により）七乃至八倍に、無線機械は一七倍半等に増大した。同時に質的改善についても彼は次の如く言つて居る。曰く「戦車の質的指數は三乃至六倍に、飛行機の速力は一倍半乃至二倍



に増大した」等々。

唯、彼の計算の基になつて居る一九三〇年の數字が現代兵器の普通の標準を示して居ると云ふのでもあれば未だしも一九三〇年の數字は此の點に於いて零に近いのである。零又は零に近い數字を幾倍しても矢張零又は精々一桁の單位に止まる。一九三〇年に小型戦車が二臺あつたとすれば（其れすらどうかであるが）其れを二五倍しても決して何百、何千とはならず、僅か五〇臺となるに過ぎない。

根據のないことを言はぬ様に一例を挙げやう。戦車及び小型戦車は無限軌道式（履帶式）トラクターを兵器に利用したものであるが重工業に通曉するオルジョニキーゼ（少くもトウハチエフスキーが大會に於いて然う云つた）の報告演説によれば一九三〇年度にトラクター一二、七〇〇が製造されたが（併し無限軌道式のものは一臺も無し）、一九三四年度には總數九千の内、一〇・五千が無限軌道式である。即ち漸く一九三四年以來無限軌道式を一般に製造する様になつた（チェリヤービンスクに一工場を開設）が、しかもトラクター九臺に付、一臺だけが無限軌道式なのである。その上、同じオルジョニキーゼが（イズウエスチャ紙一九三五年二月二日）右數の内、八、五〇〇

の無限軌道式トラクターは農業用に移讓されたと告白して居るから、二千だけ残つたことになる。併し無限軌道式トラクターが全部戦車といふ譯ではないから、戦車はほんの僅かといふことになる。これが一九三〇年に比較して二五倍並に八倍に増大したといふ眞相である。四年間に戦車の質が改善されたことは疑を容れないけれども比較の基礎になつて居るものが何れだけ劣悪なものであるかといふに、一九三〇年當時の戦車は歐洲大戰の戦利品であつたと一九三四年の二月にウオロシロフが述べて居るがつまり同大戰に使ひ古したものであつたのである。斯様な博物館物に比べて三倍にせよ六倍にせよ改善されたとしてそれが何にならう。

交通機關についてはソウエート大會に於いて赤軍代表者は一言も云はず、モロトフが僅かに言及して居るが、曰く「交通機關（鐵道）は我が經濟の弱點となつた。鐵道の輸送計畫は常習的に頓挫を來して居る」と。オルジョニキーゼは附け加へて曰く「交通機關が現在國民經濟を壓迫して居ることは何人も知る所で、莫大の金屬、燃料、建設材料、製造品が各地に停滯して輸送を待つて居るが、重工業人民委員部關係だけで四十五萬貨車以上の貨物が滞貨となつて居る」と。



昨年(二月)の第十七回黨大會に於いてウオロシローフは言明して曰く「交通機關は噓へて言へば赤軍の骨肉の兄弟なのであるが、現在では輸送がうまく行かず、將來如何になるであらうか。戦時に際しては尙更憂慮すべきで戦時には線路によつては多くの場合、現在の八一九—一〇倍も輸送業務が増大するのである」と。假りに同人が誇張して言つたとしても、戦時にもしも四十五萬貨車の軍用貨車の滞貨をみるとしたら、左様な軍隊に戦争などの出来ないことは誰にも明瞭である。トウハチエフスキーは馬匹についても一言も觸れなかつたが、ロシヤに於ては馬匹は鐵道に劣らない重要性を有して居る。然るに是がまた鐵道以上に不良な状態にある。

一九一六年にロシヤには三五百萬頭の馬が有つたが、一九二八年には三三・五百萬頭に減じた。其後共營農場の強制的普及の結果、一九三二の初迄には僅か一九・六百萬頭しか居らなくなつた。(これは一九三四年二月の黨大會にモロトフが擧げた數字である)其後も馬匹數は減少を續け(大會に於けるブヂヨンヌイの報告、ブラウダ紙二月六日號)、一九三二年には馬匹總頭數は二五パーセントだけ減少し、一九三三年には一五パーセント、一九三四年には約六パーセントの減少を來した。ブヂヨンヌイ自身が

次の様なことを言つて居る、曰く「農務人民委員部に屬して種馬管理總局が有り、私とその長官であるが、只今種馬業務については何事も申上げかねる、何故なれば漸く今職員を詮衡中であるから」と。職員がまた可なりいかゞはしい。ブヂヨンヌイは元騎兵曹長であるから馬のことは解つて居るらしいが、大會に於いて次の様に述べてゐる。曰く「二月二日に私はチェリヤビンスク及びスウエルドロフスク州の調査會から報告を受つたが、斯様な不良な成績を得るには故意に努めなければ出来ない。例へば一獸醫助手は疥癬にかゝつて居る馬五匹に對してマズート(黑色鑛油)を塗抹したがそのために馬は勿論死んでしまつた。もしも此の獸醫助手にマズートを塗つたなら、同様の結果を見たゞらう」と。多分その通りであらうが、唯ブヂヨンヌイの薦める方法も件の獸醫助手に敗けない獨特のものである。

第七回ソウエート大會に於ける赤軍に關する報告演説から得られる結論は唯一つである。ソウエート要人は自分の隣人に、又自分自身に對して自己の力を信じさせやうと欲してゐるが、是は恐怖から來て居るのである。赤軍が眞に強いか如何かはソウエートの要人の黙して言はない點を調べればよく判る。指揮官の質も兵器も、トウハ



チエフスキーの掲げた數字の如何に係らず、末だ現代の水準から遙かに劣つて居るのである。また交通機關の甚だしい荒廢、延いて戦時に於ける給養の困難は赤軍の戰鬥力を根本的に覆すものである。其れ故、赤軍の眞正な戰鬥力は國境防禦のために今度のやうに常駐守備隊の新設を必要とする程度なのである。併しながらロシアの廣大無邊な國境は左様な方法を以つてしては決して守り切れるものでない。ウオズラジヂエニエ紙三月五日號より譯出)

昭和十年七月二十二日印刷  
昭和十年七月二十四日發行

大連市星ヶ浦公園三十一號  
發行人 押川一郎

大連市東公園町三十一番地  
印刷人 吾妻力松

大連市東公園町三十一番地  
印刷所 滿洲日報社印刷所

發行所 南滿洲鐵道株式會社



終